

Maupassant と宿命

—研究ノート—

野 浪 嗣 生

Maupassant の生涯を通してみると、ことさら我々の眼を引くのは晩年の精神病院入院であろうが、彼が外見のたくましさに似ず割合早くから身体の変調を訴えており、その症状が年ごとに重くなっていったことはよく知られている通りで、したがって精神病院入院はいわば必然であったといえるだろう。彼の病気の原因が果して内在していたものか、あるいは彼の放縱な生活による必然的な帰結、すなわち syphilis によるものか明らかではないが、母の Laure が激しい神経発作の持主であったこと、彼女の兄すなわち Guy のおじにあたる Alfred Le Poittevin もそうした性質を有していたらしいこと¹⁾、さらには弟 Hervé の場合などから考えて、この家系に暗い宿命の血が脈々と流れているのは否定できないようである。むろん Guy もその血を受けついでいることはいうまでもなく、彼だけが幸運にも逃がれ得たと考えることは問題にならぬほど不自然であるといわねばならない。それから彼の放縱な生活、すなわち女性関係をいうのだが、これはもはや周知の事実でありくわしく触れないが、父 Gustave の遺伝であるといわれている。こうしてみると、いずれにしても ≪Maupassant (…)*semblait, dès sa naissance, marqué par le Destin*≫²⁾ といえるであろう。しかし Maupassant 自身はこうした宿命を宿命として感じていたで

1) Son oncle maternel, Alfred Le Poittevin, né pour faire de grandes choses mais mort trop jeune, avait usé sa vie dans les excès et le spleen.

P. Morand : *Vie de Guy de Maupassant* p. 205 (Flammarion)

2) P. Cogy : *Le Naturalisme* p. 84 (Presses Universitaires de France)

あろうか。身近に母及び弟 Hervé の病状を見、ひるがえって自らの体調を考える時、宿命の血が自らの体内に流れていることに気付いていた、という考察はそれほど無謀ではないと思われる。Maupassant の Flaubert に宛てた手紙にはそうしたことを窺わせるような文面が見られるし、Flaubert も「Il (=Guy) a probablement la même névrose que sa mère」³⁾ といい、さらにまた P. Morand は、「Guy manifesta dès sa jeunesse certains troubles héréditaires.⁴⁾」と述べている。こうしたことを考慮すれば、Maupassant が漠然とではあっても自らの宿命を宿命と感じていたと十分考えられるだろう。そこで、Maupassant の宿命に対する見解あるいは態度がどのようなものであったか、以下若干の考察を進めてみたい。

*
**

Armé d'un œil qui cueillait les images, les attitudes, les gestes avec une rapidité et une précision d'appareil photographique, et doué d'une pénétration, d'un sens de romancier naturel comme un flair de chien de chasse, il (=Lamarthe) emmagasinait du matin au soir des renseignements professionnels.⁵⁾ (Notre Cœur p. 17)

これは「Notre Cœur」の主人公の、作家である Gaston de Lamarthe について Maupassant が描写したものであるが、これはまた作家 Maupassant にそのままあてはまるというのが、彼の批評家、研究家たちの一致した見解であり、事実彼の作品を見る時この見解に首肯できる。批評家 G. Pellissier に至っては、「殆んど何ものをも創意してはいない、彼は事実の移植をしかしていないのだ。」⁶⁾とまでいいきっている。これは Maupassant の創作態度が、徹頭徹尾客観を押し通し、また描写の精確無比によるもので、まさに真のリアリストと呼ぶにふさわしい作家であろう。

3) Cité par P. Morand : *Op. cit.*, p. 204

4) *ibid.*, p. 205

5) *Oeuvres Complètes de Guy de Maupassant*, Conard

6) G. Pellissier : 最新仏蘭西文学史 [木村幹訳] p. 21 (聚英閣)

しかしながら Maupassant は、およそ10年の文学的活動期に約 300 編ほどの中短篇を書いているが、その内、E. Maynial の分類によればおよそ10%、30数編ものいわゆる怪奇物語というような作品を書いている。この作品群は他の作品群が冷徹なリアリストの眼で眺めた客観世界を描いているのに比べ、すでにその題材からしても異っているのがわかる。Maupassant がこうした怪奇なものに対して極めて興味を抱いていたことは、Gaulois 紙に《Le Fantastique》なる一文を寄せていることから知られよう。この寄稿文の中で Maupassant は、科学の発達と共に le mystérieux の退潮をいい、それにつれて la vraie peur もだんだんと消え衰えてきた、と述べている。またこれに関連して、怪奇物語作家の立場も、昔は読者の側が le mystérieux に疑いを持たなかったため作品を作り上げるにあたってさしたる困難もなかったが、le mystérieux の退潮と共に困難が増大してきたといい、このような状況にあってすぐれた怪奇物語作家の一人として Tourgueniev をあげている。その Tourgueniev が、Flaubert の家であるとき語ったという話を《La Peur》の中で書いているが、その内容を略述すると次のようなものである。

Tourgueniev が若い頃、森で猟をしている時、たまたまきれいな水の流れている川のほとりに出た。さっそく気持ちよく泳いでいると突然人だかケモノだか見分けのつかないものに襲われ、必死の思いで逃げたが、そのものはいつまでも面白そうにあとを追いかけてくる。恐怖に狂わんばかりの Tourgueniev は、あわや、というとき羊飼いの少年に助けられる。あとで聞いたところではその正体は狂女であった。

《On n'a vraiment peur que de ce qu' on ne comprend pas.》⁷⁾ と、Maupassant は Tourgueniev の言葉を述べているが、この場合の la peur はその原因となる人だかケモノだかわからないものの正体が狂女である、とわかってしまったとき自ずから消滅するものであることは理解できる。してみれば先程見てきた科学の発達による le mystérieux の退潮と、あ

7) *La Peur (La Petite Roque)* p. 269 ()内は Conard 版 Maupassant 全集の短編集の標題名。以後同様の表記とする。

る意味では同じことになるのではなからうか。Maupassant の怪奇物語中、そのいくらかはこうした Tourgueniev の影響を受けたであろうと思われるが（例えば、埋葬した娘が家に帰ってきたので、幽霊だと思って非常に恐怖に捉われるが、実際は本当に死んでいたのではなかった、という《Le Tic》など）、しかしまたある一連の物語は、いかにその inexplicable なものを説明あるいは理解しようと試みても全く不可能なものが登場する。この種の作品は、Maupassant を精神病院へと送る、さきに見た病気の進行具合を知るうえに極めて有力な手がかりになるといわれているが、それはともかく極めて純主観的で、Tourgueniev 流の怪奇物語——すなわち理解しえないが故に恐ろしいという——とは異なり、全く Maupassant 独特の怪奇物語といえるだろう。その一例として有名な《Le Horla》を見てみよう。この Horla なるものは、題名でもあり主題として取り扱われていて確固たる存在であるにもかかわらず、その実体は作品中いずこにも現われてこず、ただ主人公の頭の中に存在しているだけであってもはや理性や悟性では計り知ることのできない全く実証不能な存在である。したがっていうまでもなく科学の発達などとは全く無縁のものであり、さきの寄稿文の理論に当てはまらない Maupassant 独自の怪奇物語といえよう。Maupassant は Tourgueniev の怪奇物語に対する叙述態度について、《Il(=Tourgueniev) n'entre point hardiment dans le surnaturel, il raconte des histoires simples où se mêle seulement quelque chose d'un peu vague et d'un peu troublant》⁸⁾と述べているが、この言葉をまねていえば、《Maupassant entre hardiment dans le surnaturel.》といえるだろう。

ところで、さきの《La Peur》の中で、現在 Toulon で流行しているという Choléra について、《ce n'est pas la peur d'une maladie qui affole ces gens. Le choléra, c'est l'Invisible, c'est un fléau d'autrefois, des temps passés, une sorte d'Esprit malfaisant》⁹⁾ま

8) *ibid.*, p. 270

た《inexprimable et terrible》¹⁰⁾ なるものである、という言葉が見い出せる。換言すれば、不可知、不可思議な Choléra は inexplicable な実証不能の存在、あの Horla と同様な存在として述べられており、この不可思議な存在に対して人々はただダンスをし、花火を打ち上げ、祭りのかがり火をたき、オーケストラは陽気な曲を演じるのである。これは人々が Choléra に対して挑戦し、勇気のあるところを示すためである¹¹⁾、としている。これからわかるように、こうした超自然的な、しかも確固とした存在に対してささやかなしかし精一杯の反抗、抵抗を人々は試みるのである。しかしここで Maupassant 自身の surnaturel な存在に対する見解、態度に論及する前に、また違った視点からの考察を進めておきたい。

Maupassant はいたるところで自然に対する深い愛情を披歴しているが、ことに紀行集《Sur L'eau》の中では自身が自然の一部であるかのような自然賛歌を高らかに誇らかに歌いあげている。

ところが、例えば《L'Inutile Beauté》の中には次のような言葉が見られる。(この作品は四章に分かれているが、その第三章では物語の主人公達とはほとんど全く関係のない二人の人物を登場させ、主人公達に関する意見に関連して、いわば哲学的な会話をさせている。この章は物語の流れからほとんど完全に浮き上がっているが、二人の内の特に Roger de Salins という人物に、Maupassant が自分の考えをことさら意識的に表明せんがため、こうした形式となったのであろう。) 《je dis que la nature est notre ennemie, qu'il faut toujours lutter contre la nature, car elle nous ramène sans cesse à l'animal.》¹²⁾ これは、Maupassant が動物学的、すなわち本能主義とでもいえるような態度をむしろ誇らかに高言して

9) *ibid.*, p. 277

10) *ibid.*, p. 278

11) C'est qu'il est là, c'est qu'on le brave, non pas le Microbe, mais le Choléra, et qu'on veut être crâne devant lui, comme auprès d'un ennemi caché qui vous guette. *ibid.*, p. 278

12) *L'Inutile Beauté (L'Inutile Beauté)* p. 25

いたことからみれば極めて興味深く思われる。

さらに、すこし先に神を《comme un monstrueux organe créateur inconnu de nous, qui sème par l'espace des milliards de mondes, ainsi qu'un poisson unique pondrait des œufs dans la mer. Il crée parce que c'est sa fonction de Dieu.》¹³⁾ と、神があらゆるものの生産者であるとみなしている。

Maupassant はいたるところで神に対する攻撃をしているが、例えば彼の出世作《Boule de suif》における二人の尼僧、あるいは《Une Vie》における Tolbiac 神父に対する攻撃と、さきあげた Roger de salins の神蔑視の言葉とは別種のものであることをここで確認しておきたい。《Boule de Suif》の二人の尼僧も Tolbiac 神父も共にキリスト教徒であり、したがって攻撃されているのはキリスト教のいう神であって、Roger de Salins のあらゆるものの生産者である神とは自ずから異なるものである。いずれにしても攻撃していることに変わりはないが、この違いは重要に思われるのははっきりと区別しておきたい。

さて、Maupassant は神のあらゆる点について論及し、嫌悪、反抗を表明しているが、神の持っている恐しい面の、あるひとつを捉えて激しく弾劾しているのはおそらく《Moiron》においてであろう。

正直で純心で、神をあがめ崇拜している Moiron が、最愛の息子たち三人の死によって彼があがめていた神の正体を突然にさとり次のようにいう。

(…) et je compris que Dieu est méchant. Pourquoi avait-il tué mes enfants? J'ouvris les yeux, et je vis qu'il aime tuer. Il n'aime que ça, monsieur. Il ne fait vivre que pour détruire! Dieu, monsieur, c'est un massacreur. Il lui faut tous les jours des morts. Il en fait de toutes les façons pour mieux s'amuser. Il a inventé les maladies, les accidents, pour se divertir tout doucement le long des mois et des années; et puis, quand il s'ennuie, il a les épidémies, la peste,

13) ibid., p. 28

le choléra, les angines, la petite vérole; (...)」¹⁴⁾

そして神への復讐のために、神ではなく Moiron 自身が子供を殺してゆくのである。しかし悲しいことに、この Moiron のとった行動は、彼自身は神への復讐と信じているにもかかわらず、明らかに神の計画にかなっている、ということをも認めなければならない。

ただ Maupassant は、この世界——人間も、またその運命も含めて——が神によって作り出されたにもかかわらず、神の意志によらない、つまり神の作り出そうとする意図から独立した全く偶然のものが、人間に生じた、つまり la pensée humaine がそれである、とききの《L'Inutile Beauté》の中で述べ、その証明をすら論じている。しかし仮にこの証明が正しいにしても（この証明は一応論理的で筋が通っているように思われる）、Maupassant 自身が他のところで述べているように（そしてこれは彼の根本理念であるが）、《la pensée de l'homme est immobile》¹⁵⁾であり、つまるところ《Nous ne savons rien, nous ne voyons rien, nous ne pouvons rien, nous ne devinons rien, nous n'imaginons rien, nous sommes enfermés, emprisonnés en nous.》¹⁶⁾ということである。結局我々人間は、生産者である神に対して全く無力であり、ただその意のままに流されてゆくしかないのである。

さきに Maupassant が彼独自の怪奇物語で、人間の知力を越えたもの、眼には見えないがしかし絶体的な力を持つ君臨する存在がある、ということを示唆し、説明せんとしているのを見てきた。そしてこの surnaturel な存在を、宿命、と置き換えてもそれほど見当はずれとは思われない。それはあらゆるものの生産者である神——これはいうまでもなく宿命と同義である——がどんなものであったかを考えればうなずけるであろう。繰り返して言うが、この神（宿命）は、貧弱な la pensée humaine、をいか

14) *Moiron (Clair de Lune)* p. 202

15) *Sur L'eau* p. 44 (*Oeuvres Complètes de Guy de Maupassant, Conard*)

16) *ibid.*, p. 43

に駆使しようともどうしようもない絶体的なものであり、これを前にして我々人間は、あの Toulon の人々のように、恐くはない、勇気があるんだ、という態度（むしろ虚勢）を示しうるにすぎないのである。

余談ながら Maupassant が迷信を信ずるとは行かないまでも「J'appartiens à la vieille race, qui aime à croire. J'appartiens à la vieille race naïve accoutumée à ne pas comprendre, à ne pas chercher, à ne pas savoir, faite aux mystères environnants et qui se refuse à la simple et nette vérité.」¹⁷⁾ という「La Peur」の中の人物のように思っていたことにもいくらか留意しておきたい。というのも Maupassant のこの趣味が怪奇物語という形式を取らせ、surnaturel の存在を示すことによって人知を越えた存在がある、といわんとしているのであるし、なによりも、あれほど冷酷なリアリストといわれた Maupassant がこうした全く正反対とも思える一面を有していたということが興味深い。

Maupassant と宿命というテーマのもとにこの小論を進めてきたが、ここでいささか結論めいていえば Maupassant は次のようなことをいわんとしているように思われる。すなわち我々人間は「les insectes éphémères des soirs d'été」¹⁸⁾ と同様に、「monstrueux organe créateur…ignorant de ce qu'il fait, stupidement prolifique」である神によって作り出され、子孫を残し、そして死んでゆく。我々自身の意志などどこにもは入り込む余地はない。宿命という動かすことのできないくびに引きずられて行くだけである。

こうして見てくれば、Maupassant は宿命論者であったといえるだろうが、彼の場合締観へと進まずに la pensée humaine という脆弱な武器を手段として宿命に抵抗する姿勢がうかがえる。しかし、はからずも「Le Horla」の結末に暗示されているように、この抵抗が無益なものであることを Maupassant 自身が一番良く知っていたであろう。彼の作品の主人公

17) *La Peur (La Petite Roque)* p. 267

18) *L'Inutile Beauté (L'Inutile Beauté)* P. 26

達が、ほとんどの場合非情な運命に流されて行くのはその現われでもあろう。だがこの抵抗する姿勢こそMaupassantの身上であり、彼の全てがあるのである。